

プロジェクトの現場を支える専門家集団

開発「コンサルティング企業

高度な技術と知見を蓄積

開発途上国の社会・経済の健全な発展をサポートするために、日本政府が実施する政府開発援助（ODA）のさまざま

なプロジェクトは、現地の事情に精通し、ハード・ソフトの専門的技術と知見を有する「開発協力のプロ」の存在が欠かせない。その中核として、現場でプロジェクトの実務を担当しているのが、開発コンサルティング企業であり、業界全体で約2500人の開発コンサルタントと呼ばれる専門技術者集団である。

政府（外務省など関係省庁）が策定し、国際協力機構（JICA）などが実施するODA案件は、JICAから業務委託された開発コンサルタントが、相手国の政府機関や地域住民との協議、現地調査などを踏まえて効果的な解決策を提案していく。その領域は農林水産業、水資源開発、運輸・交通、鉱工業・エネルギー、保健・医療、教育、経済、行政、社会全般まで多岐にわたり、途上国の国造りに関わるあらゆる分野をカバーしている。

その実務は、事前調査から計画策定、施

工監理、事業評価まで実に幅広い。JICAがこうした調査・計画業務を含め、コンサルティング企業に発注する契約件数（2010年度）は1532件に上る。このように重要な役割を担っているにも関わらず、開発コンサルタントの仕事は意外に知らない。（社）海外コンサルティング企業協会（ECFA）の高梨専務理事は、「大学のセミナーで講師を務めることもあるが、開発コンサルタントという仕事をよく知っている学生は少ない。JICAを支える『黒子役』だったためで、今後は情報をもつと積極的に発信する必要がある」と語る。ECFAは正会員57社、賛助会員10社、協力会員2社が加盟し、途上国の経済発展、ODAの促進に寄与している業界団体。先の東日本大震災では、社会貢献と対外的な情報発信の一環として、インドネシア、オランダなど途上国で多くの被災地復興プロジェクトに携わった経験を生かし、「東日本大震災復興に向けた緊急提言」を発表して関心を呼んだ。

若い世代の認知度が必ずしも高くなるのは、大学新卒者採用が少ないという事情もある。JICA発注案件の入札では、プロジェクトを担当するコンサルタントの年数が重要な評価対象になるが、「30歳半ばくらいまでは実務経験を評価してもらえない」（高梨専務理事）こともあります。新卒を採用しても10年程度の育成期間が必要とされてきた。そのため、各コンサルティング企業は、完成された専門性を



ウガンダ北部復興支援の現場で聞き取り調査する開発コンサルタント

持ち、経験豊富な即戦力人材の中途採用に傾きがちだった。

新卒採用も積極的に

しかし、最近は大手コンサルティング企業を中心、新卒採用を積極的に行なう動きが見られる。全体的に50歳以上のベテラン層が厚くなつておらず、団塊世代のリタイアもあって、今後は年齢構成を平準化し、自社のカルチャーや技能・知識を継承して再活性化する意味でも、新卒を採用して独自に育成する必要性が生じていることが背景にある。

高梨専務理事は「これまで開発コンサルティ



システム科学コンサルタント（株）企画営業部次長

竹田真一郎さん Takeda Shinichiro

現地の人と一体になって仕事を成し遂げる喜び

父親の仕事の都合で、小学校の4年間をパキスタンで過ごしたことが、自分の中で“原風景”になっていると思います。大学院修了後、大手設計事務所に就職するつもりだったのですが、ふとしたきっかけで、やはり途上国で建築関係の仕事をしたいと考え直し、開発コンサルタントの職を選びました。

内定後にインターンとして、ボリビアの保健医療プロジェクトの調査に参加させてもらい、初めてコンサルタントのプロフェッショナルな仕事ぶりを目の当たりにしました。入社して間もなく、アフガニスタンとモーリタニアの学校建設に関わり、特に後者では事前調査から設計、建設工事の監理まで、一通り経験を積むことができました。

この仕事では、ひとつの業務が必ず次につながると思います。例えば、国内業務としてテレビ会議システムを使ったJICAの遠隔技術協力事業を担当しましたが、その時に習得したノウハウは、現在実施中のアフガニスタンの教員教育強化プロジェクトや、エジプトの学校保健プロジェクトの映像教材作成などに役立っています。

開発コンサルタントとして、途上国の人々に技術を伝える半面、異なる考え方、世界の多様性など、むしろ相手から教わることが多いと実感しています。現地の人々と意見をぶつけ合い、協力し合って事業を成し遂げた時の達成感は、一度味わうともう“病みつき”です。

Career Path

- 27歳 日本大学大学院・修士課程修了（建築工学）、システム科学コンサルタント（建築設計部）
- 33歳 情報開発本部に異動
- 34歳 1年間休職して世界一周旅行
- 35歳 復職、企画営業部に異動

そうだから助けてあげなくては」という

コンサルタントの仕事紹介 (社)海外コンサルティング企業協会

開発コンサルタントの仕事を学生・大学院生、社会人に広く知ってもらおうと、(社) 海外コンサルティング企業協会(ECFA)は新たに大学などへの出前講座に取り組んでいる。

名古屋大学農学国際教育協力研究センターで2011年6月に開かれたオープンセミナー「開発コンサルティング業務とは～開発途上国最前線から～」では、経験豊富なECFAのベテラン講師が、ODA案件における業務内容、業界の市場規模、女性の進出度、求められる人材像やキャリアパスなどを分かりやすく解説。また、現役コンサルタントがアフリカで実施中のプロジェクトを例に、現場での仕事ぶりを紹介した。

ECFAは広報活動の一環として、各地の大学やJICA地球ひろば（東京）などの講座に積極的に講師を派遣していく方針。個別相談も行われるので、開発コンサルタント業界に興味がある人は、こうした機会に参加してみるといいだろう。

情緒的な発想では、コンサルタントを統ることはできない」と指摘する。途上国に対する理解を深め、課題を解決するのにはどうすればいいかを常に考える「分析的な思考力」も問われる。入社後は計画・調査業務を通じたOJTに加え、社内の

さまざまな研修制度に参加し、自分を磨くことになる。

開発への強い意志と専門性を備えて、途上国の国造りの現場を担う開発コンサルタントの責任は重く、その道も容易ではないが、それだけに何物にも代えがたい充実感とやりがいが待っている。